

文化体験「ジャンベ・縄文太鼓演奏体験」

言葉をこえて、ひとつの音楽をつくる



12月4日、当センター初の試みである太鼓の演奏体験が行われました。太鼓を叩いていると、自然と心が解放され、言葉を越えた交流を体験することができました。



講師は一般財団法人縄文芸術文化財団代表理事で打楽器奏者の茂呂剛伸さんと、同財団の理事で茂呂さんに師事する石田しろさんのお二人。茂呂先生は、西アフリカの民族楽器であるジャンベの演奏と制作をガーナで学び、帰国後アフリカのリズムと、子どもの頃から習っていた和太鼓のリズムを融合した独自のスタイルで演奏活動をしていました。あるとき、北海道と結びつきの深い縄文文化と出会い、より北海道の大地に根差した音楽を追求するようになりました。先生の地元、江別の土で作った土器にエゾシカの皮を張った縄文太鼓は、その過程の中で生み出されました。

ジャンベ、縄文太鼓の紹介に続いて、茂呂先生が取り出したのは、函館で出土した中空土偶と呼ばれるちょっととぼけた表情の土偶のレプリカ。作りがとても精巧で、道内唯一の国宝に指定されています。茂呂先生は、縄文時代の人々は心の豊かさを大事にしていたと話しました。石田先生もアイヌの人々との関わりを通して、一万年以上も争いごとのなかった縄文の時代に魅了されたことを話してくれました。





演奏体験では、先生に教えてもらったリズムをみんなで繰り返したり、強弱のつけ方を自分で工夫してひとりずつ順番に叩いたりしました。最後はひとつのリズムをみんなで繰り返す中に先生の演奏が加わり、見事な合奏に。先生の掛け声に合わせて大きくひとつ叩いて締めくくられ、不思議な一体感を味わうことができました。

演奏体験の終わりに参加者のひとりひとりが、「みんながひとつになって感動した」、「初めての体験だったけれど楽しかった」、「別の世界に行ったような不思議な気持ちになった」といった感想を述べました。

最後の講師による演奏に

参加者全員がスタンディングオベーション！

「みなさんと出会えた喜びをこめて、最大限の演奏をさせていただきました。今日はみなさんに会って本当にうれしいです」という茂呂先生の言葉が印象的でした。石田先生もお父さんが満州からの引揚者であると話し、「もしかしたら自分も帰国者のみなさんと同じような境遇だったのかもしれない。今日ここでみなさんと出会ったことに不思議な縁を感じます」と話しました。

まさに太鼓で会話をし、互いに響き合い、ひとつの音楽をつくりあげる時となりました。

稚内・地域生活支援推進事業

ロシア料理を帰国者が紹介



稚内では 11月18日に帰国者を講師とした料理交流会が開かれました。事業を委託している稚内日口経済交流協会が、昨年と同様に地元の新報で参加希望者を募り、8名の市民のみなさんが帰国者と一緒に関西料理を作りました。帰国者自身が親しんできた文化を地域のみなさんに紹介することができました。

8名の参加者の中には「去年習った料理がとても美味しかったので」と、昨年から続けて二回目の参加となる人もいました。メニューはボルシチ、ひき肉を入れたブリヌイ(クレープ)、パンにつけて食べるカボチャのピューレ。ロシア料理のレパートリーをさらに広げた人、ピーツを初めて見たと言う人、残留邦人について初めて知った人など、参加者それぞれが新たな体験をすることができました。帰国者にとっても、貴重な交流の機会となりました。



健康運動教室「ボッチャ体験」

回を重ねてどんどん上手に！

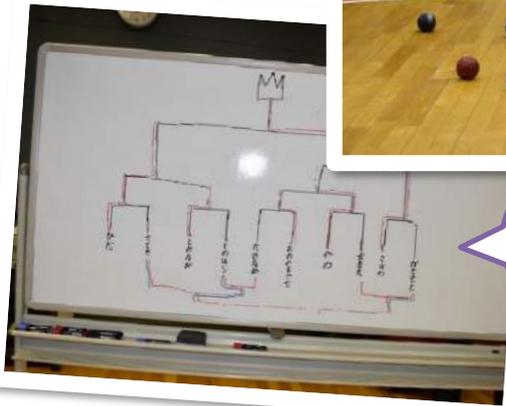
11月22日、12月13日にボッチャ体験が開催されました。



12/13 の決勝戦
は夫婦対決！！



職員も審判
に挑戦



試合はトーナメント方式で行われました



ボッチャ体験は、これまで同様NPO法人「あ・りーさだ」の代表の正木英之先生の指導で行われました。やはり回を重ねると、参加者のみなさんもルールをすっかり飲み込んで、開始時間前から練習試合が行われていました。2回目、3回目ともトーナメント方式の個人戦で行われ、特に3回目は最後まで予測のつかない接戦が多くなりました。正木先生からも、さらに試合が面白くなる色々な戦法を教えてもらうことができました。



12月13日の体験では、クリスマスが近かったこともあり、表彰式にはサンタクロースが登場、勝者にプレゼントが贈られました。

日本語教室

みんなで力を合わせて動画制作



新型コロナウイルスの感染拡大がなかなかおさまらないこともあり、今年度の日本語教室の学習発表は、受講生のみなさんの動画出演となりました。童話「裸の王様」の登場人物を受講生が演じたほか、ナレーション部分なども細かく分けて、ひとりひとりが担当できるようにしました。密を避けるため、できるかぎり個別で撮影をしました。これまでの学習発表会の劇などで活躍していた帰国者は、今回も抜群の演技力を発揮。みんなで力を合わせて、思い出に残る、また手元にも残る作品が出来上がりました。



クランクアップ！記念
に所長とパチリ！



2月・3月の行事

- | | |
|-------|------------------|
| 2月28日 | 文化交流会「ひな飾りづくり」 |
| 3月5日 | 中国・樺太帰国者文化祭（作品展） |
| 3月5日 | 中国・樺太帰国者を知る集い |

※新型コロナウイルスの感染状況によっては、中止・延期となる場合があります。

※介護予防サロン（手稲前田・もみじ台）、健康運動教室については、開催前に案内をお送りします。

中国残留邦人等支援に係る連絡会

言い尽くせない孤児の悲しみ

11月11日中国残留邦人等支援に係る連絡会が開催されました。昨年同様プログラムの最後に、中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部である今村幸一さんの講話を聞きました。

添乗員として働く中で、戦没者の遺族の悲しみに触れたことが語り部となるきっかけだったという今村さんは、中国残留孤児の片野坂忠光さんの生涯について語りました。帰国後の現在の生活を「幸せです」と言いながらも、時折暗く沈んだ表情になり、中国にいる間お母さんのところに帰りたと思っていたその思いを今も忘れていない、と言う片野坂さん。その言い尽くせない悲しみを少しでも感じてもらえれば、と結びました。